

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 川崎 惣一

本論文は、普通、前・中・後期に区分されるメルロ＝ポンティの哲学全期にわたってその主要思想を検討し、特にメルロ＝ポンティによる主観性の成立構造の探求がどのようにして深められていったかを中心にまとめた労作である。

第一部では、まず最初期の著作『行動の構造』のうちに知覚主体としての身体が発見される様をたどり、身体論として読み解かれるべき主著『知覚の現象学』の分析につなげた。その分析では、身体が知覚の非人称的主体であるというメルロ＝ポンティの主張を考察し、身体は実は知覚が成立してくるための実存の地を構成するだけであり、主体が立ち現われてくるための土台に過ぎないと断じ、メルロ＝ポンティに未だ曖昧性があることを突いた。ついで論者は同様の曖昧性を暗黙のコギトという概念、時間性の構造に関する議論にも指摘した。第二部では、表現的主体の成立に焦点を当てることを終着点に睨みつつ、メルロ＝ポンティの前・中期における言語論を検討し、身体的実存の様式と言葉の意味との連続性、意味の超越、表現を成立させる自発的な働き等を考察した。第三部は、メルロ＝ポンティ後期の存在論の解明という困難な作業に挑み、それまでに論じられた、身体、知覚、時間性、言語のみならず、他者という主題を含めたすべてが、そのそれぞれの切り口を通じて、存在するものすべての普遍的次元である〈存在〉の考察へと送られ、そこから捉え直されるべきものであることを示した。そして、特に本論文の主題である主観性の成立構造に関しては、〈存在〉の自発的働きを根底にした再帰的構造をもつ身体運動＝知覚を通して自己が構成されることを見届けた。

以上のように、本論文は、今日の哲学や心理学等の諸科学、思想に大きな影響を与えたメルロ＝ポンティの思想をその全般にわたって取り上げつつ、メルロ＝ポンティによる主観性の成立構造の探求を追い、その最終形態を彼の存在論のうちに読みとろうと努力し、一定の成果を上げたものである。それは、メルロ＝ポンティの真意を掬い取ろうとして彼の思考に密着せんとする余り、彼の独特の用語や言い回しに寄りかかる仕方ではかその考察内容を表現できなかった部分をももつ憾みはあるものの、メルロ＝ポンティの思想を多岐にわたって追考し、おのれの知見を数々のメルロ＝ポンティ研究のうちに位置づけることも怠っていない、好論文である。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。